

聞名仏教

第 164 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 5 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

浄休寺ぼとけ

佐々木蓮磨

滋賀県の山東町本郷に、浄休寺という大谷派の小坊があります。この寺の先代に、了端という信徳の篤い住職がられました。

本堂の前で、子供が石の投げ合いをしているうちに、石が一つ本堂の障子を破って、孤明師の後ろに飛んできたそうです。

師はよく長浜御坊に参って、念仏相続されたそうですが、法悦が高まると必らず座を立つて合掌念仏しながら堂内を行道されたそうですが、参詣の同行衆も、いつの間にか己を忘れて、師の後について念仏行道しておったということでありました。しかし、その姿が決してわざとらしくなく、極めて自然であったので、見る人ごとに「浄土のお姿を見るようである」と讃えたといっております。

今日の知識人に聞かせる、「そんな馬鹿なことがあるか」と一笑に附すことでしょうか、そうした修行者の行力によって現わされる奇現象は、あながちに否定することはできないのではありませんまいか。現代人はあまりにも人智万能の迷信に陥っているため、人間の知性で解決のつかぬ現象については、全面的に否定する傾向が強いことは科学文明の一次陥ではないか?と思いません。

この住職は、大谷派随一の碩学香月院(一七四九〜一八一七)の社中でありましたが、この人は生来求道の念が厚く、学問より聞法に力が入り、常に信仰上の問題を師に質し、口には念仏の絶え間がなかったということがあります。そこで香月院師は、了端の信徳に感じて、特に《孤明》(ひとり信に明らかなの意か?)という名を授けたということでもあります。

子供らは、おそらく叱られることと思つて小さくなつていると、師は念仏しながらその石を拾って、障子の外に捨てて一言も子供らに小ごとをいうことなく依然として念仏もろとも、元の座についておられたそうです。こんなところに、何物にも邪魔されない師の念仏生活が、窺われるではありませんか。

その頃、近郷に天台の律僧で百如比丘という隠れた名僧がおられました。不思議なことには孤明師と肝胆相照らし、始終往来して道を語り合せておられたそうですが、あるとき百如比丘が孤明の寺に浄休寺に来て仏舎利塔(古来浄休寺に奉安されていたもの)を仏前に安置して、舎利経を読まれたところ不思議なことには、舎利塔の中の舎利

が忽念として躍り出し、読経の終るまでつづいたということです。この話は単なる伝説ではなく、その時十一、二歳の子供であった古老が、実地に見たということ語っていたのでありますから、事実であったことと思われまふ。

孤明師が前席をつとめるときには、香月院は必ず後門に参つて、孤明師の法話を聴聞し「孤明の説教はありがたい」といつて随喜されたと伝えられております。孤明師は自坊に在るときは、殆ど本堂の中尊前に坐つて称名念仏しておられたそうですが、あるとき

師は法要その他のことで外出された場合、いかに遅く帰られても、必らず本堂の五尊前に参り、丁寧に礼拝称名しないかぎり、床に就かれなかつたそうです。聞信徒が山道を歩いていても、先方から師の念仏の音が聞こえると「浄休寺ぼとけがおいでた」といつて拝跪したと伝えられます。

人間の知性で、一切の現象が解決されるのであればともかくも、一寸先も分から知性を以つて、いかなる現象をも割り切ってしまうという態度は、反省すべきではないでしょうか。人智の過信は世を冷たくし、生活の豊かさを害うように思われます。

了

対話編 『浄土真宗』

10

B 「前回、法蔵菩薩の四十八願の中に、浄土に関する願と、法蔵菩薩ご自身がどういう仏に成りたいかという仏身に関する願のお話を伺いましたが、今回は一切衆生を浄土に生まれしめる願についてお話ください」

A 「衆生が浄土に往生する願は十八、十九、二十の三願あり、十九願、二十願は十八願に帰入せしめたもう方便（おてだて）の願であることはすでに述べました」
B 「第十八願は『仏説無量寿経』（以下、『大経』と略称）ではどのように説かれているのですか」

A 「法蔵菩薩が建てられた第十八願の文は『大経』には以下の文となっています。

設我得仏 十方衆生 至心
信樂欲生我國 乃至十念
若不生者 不取正覺 唯除
五逆 誹謗正法

（書き下し文）たとい我仏を

得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、わが國に生ぜんと欲いて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

です。この十八願を細かくお話するととても長くありませんので、大事な点に絞って申し上げます。まずこの十八願に浄土に往生する行が説かれています。浄土に往生する法ですね。いわばアミダ仏の救いです。それは第十八願の中でことごとく十方衆生 乃至十念 若不生者 不取正覺」と説かれています」

B 「この内容が一切衆生が救われる法なのですね」

A 「ええそうです」

B 「なぜこれで一切衆生が救われるのですか」

A 「ここにアミダ仏が今ここにいます。私たちがありのまま、このまま全面的に受け取ってください、まるま

る引き受けて往生させてくださるお誓いが示されています」

B 「なぜですか」

A 「それはまず（一切衆生よ）と万人に喚びかけられ、全ての人ももれなく救いたいというお心を示しておられます。そして（乃至十念）とは（乃至）は数を限定しないというお心です。十念とは十回の念仏ということ

です。それに（乃至）がついてますので、十回に限定しないで、一回でも百回でも万回でもいいのです。切り詰めれば一回でもいいのです。そして念とは念仏で、称名念仏のことです」

B 「称名念仏というのは、口でナムアミダブツと称えることですね」

A 「ええそうです。極めて簡単でやさしい行いです。阿弥陀仏の名である南無阿弥陀仏を口で称えることです」

B 「（若不生者 不取正覺）とは」

A 「（若し生まれずは正覺を取らない）、ということ、たつた十声なりとも南無阿弥陀仏を称えるばかりで、もし汝が浄土に生まれることができないようなら、法蔵菩薩である私は正覺を取らない、いわば仏に成りません、という誓いです。このところを親鸞聖人は『唯信鈔文意』に、

（乃至十念 若不生者 不取正覺）というは、選択本願の文なり。この文の（乃至）乃至十念のみな（名）をと

えんもの、もしわがくに生まれずは仏にならじとちかいたまえる本願なり。（乃至）は、かみ・しもと、おおき・すくなき・ちかき・とおき・ひさしきをも、みなおさむることばなり。多念にとどまることをやめ、一念にとどまることをとどめんがために、法蔵菩薩の願じまします御ちかいなり。

と述べられ、あるいは『一念多念文意』に、

本願の文に、（乃至十念）と、ちかいたまえり。すでに

（十念）とちかいたまえるに於てしるべし、一念にかぎらずということ。いわんや（乃至）とちかいたまえり、称名の遍数さだまらずということ。この誓願は、すなわち易往易行のみちをあらわし、大慈大悲のきわまりなきことをしめしたまうなり。

と仰せられています」

B 「この誓いが一切衆生が救われる誓いなのですね」

A 「ええそうです。こういう意味で十八願を念仏往生の願といえます」

B 「なぜ、この誓いが一切衆生を浄土に生まれしめる誓いになるのですか」

A 「それは結論的に言えば、法蔵菩薩は私たちに、浄土に往生せしめるために何の条件もつけないということです。いわば私どものような罪深い存在をまるまる引き受けて浄土に往生せしめようという誓いなのです。このような誓いを成就せん

がために法蔵菩薩は永劫の修行をし四十八願成就して、すでに仏となっておられ、それから十劫という長い時間を経て今に至っている、『大経』に説かれています。これを親鸞聖人は、次の和讃に詠われました。

弥陀成仏のこのかたは

いまに十劫をへたまえり

法身の光輪きわもなく

世の盲冥をてらすなり」

B 「よく真宗はへソノママ

のお助け」といわれますが、このいわれなのです。なぜこの念仏往生の願がそういう意味をもつのですか」

A 「それは法蔵菩薩が私たちに往生の条件を付けて、へ心に浄土を思い続けるなら」とかへ仏の慈悲を感得するなら」とかへ法を喜ぶ者を」とかへ嘘をつかない者を」とかへ他のいのちを殺さない者を」とかへ毎日精進する者を」とかへ経典の意味をよく理解する者を」とかへ心やさしい者を」とかへ腹立ちの少ない者を」とかへ人をねたまない者を」とか、なにか一つでも私た

ちに善き行いと善き心とか深い仏教の理解をもつとかを条件として浄土に往生せしめるといふ誓いであれば、かならずそうなれない者、ならない者、落ちこぼれる者がでてきます。そうすると一切衆生を救うことができません。それゆえ衆生に何も要求せず、へ十声なりとも称えるばかりで助ける」と誓われたのです。ここに絶大の慈悲心が現れているのです」

B 「へ乃至十念 若不生者 不取正覚」のお心が少し理解が出来ましたが、へ乃至十念せよ」といふ言葉、いわばへ十声なりとも一声なりとも称えよ」と聞くと、南無阿弥陀仏と称えることがな

お一つの条件のように聞こえますが、そこはどのようなでしょうか」
A 「昔から、そういう問いが繰り返されました。これについてはさきほど申しましたように、法蔵菩薩は私たちをへありべのまま、煩惱具足のソノママなりを全面的に引き受けて助けるというお心を私たちが受け取

りやすいようにへわが名を称えるばかりで助ける」と言われるのだといえましょ。切り詰めて言えばへ一声なりとも称えるばかりで助ける」との仰せは、私たちが一声称えるかどうかで私の往生が決定するというお心では当然ありません。私たちが口先で一声念仏するかどうかで私が浄土に生まれることが決定するなんていうこと自体がナンセンスです。私たちが浄土に生まれるのは全面的に阿弥陀仏の大悲のお力によつてであつて、小さな塵のような私たちが口先で一声となえるかどうかで浄土への往生が決まるわけがありません」

B 「そうすると私たちが念仏を称える行いが要求されているのではなく、まるまる助けるというお心を表されたのですね」

A 「ええそうです。なぜへ我が名を称えるばかりでよい、助ける」といふ一つの行を出されるかという、私たち凡夫が困窮している人間だということ、道を見失っている存在だということ、

自分で自分をどうすることもできなくて行き詰まっている存在だということ、へ私

は一体どうしたらいいのか」といふ嘆きにいる人間だということ、そういうどうにもならなくなつてしまつている人間だということ、を、本當に知り抜いてくださつた法蔵菩薩の大悲の涙から出た一句がへ我が名を称えよ」の一句なのです。私はどう思つたらよいかより、私はどう考えたらよいかよりも、私は今へどうしたらいいのか」といふのが困窮せる人間の嘆きです。この嘆き悲しみに共感してそこにへ我が名を称えるばかりで汝のすべてを引き受けるとの念仏往生の願がなんと云つても有り難く、そこに無窮の大悲を感じざるをえないのです。

B 「へソノママ助ける」といふ仏の仰せを心に思つたり考えたりすることは、救いそのもの、いわばへ引き受ける」といふ仰せ（勅命）を人知でつかんでしまいがちです。それを法蔵菩薩は知つていてくださつてへソ

ノママ念仏してこい」といふ行において絶対の大悲を受け取らせてくださるのですね」

A 「ええそういただいでいます。なおこのところで真宗の大家といわれる金子大榮先生の言葉に、

仏の大きな真実は、今度はへ称我名字」の一つに入つてしまふのでございませう。即ち、仏が吾々に向つてへ我が名を称えよ」とおつしやる一句の中に、仏の真実の全体の表現があるのである。へ我が名を称えよ」といふところに、仏のあらゆる誠が籠つていのであります。至心、信樂、欲生我國という風に、いろいろ並べてあるが、いよいよこの時になると、昔の高僧は、善導大師にしても、或は法然上人にしても、第十八願は我が名を称えよ必ず救うという本願である、とおつしやるのです。そのへ我が名を称えよ」といふ一句に、どういふものが感ぜられるか、そこに信があるので、極めて簡単なであります。とか、

へ我が名を称えよ」の一句は、吾々人間がどういふ生活をし

信心夜話

ているか、ということを見透している者の一句である。人間の悩みを知り抜いている者の言葉である。これではどうしても助からない状態であるところの人間であるということを知り抜いて、それをいたみ悲しんで、その涙から「我が名を称えよ」という一句が漏れて出てきたのである。だから「我が名を称えよ」の一句に盛られている眞実は、如何に説いても説き尽くせないところの、廣大無辺の眞実をもっております。

と言われています」

B 「この念仏往生の願の信心は日頃勤行している「正信偈」ではどこに示されていますか」

A 「〈極重悪人唯称仏〉の一句に端的に表されています」

B 「極重悪人とは」

A 「煩惱が絶えず起こり、しかもその煩惱をどうすることもできず、いつまで経つても自分で自分をどうすることもできない愚悪の間、それが極重悪人の私たちであると教え、その様な私たちに〈唯称仏〉で〈た

だ仏名を称えよ〉と仰せられる大悲のお心です。この一句は多くの人の光となりました。身近には木村無相さんという一生、眞実を求めて歩まれたお方がありましたが、六十歳近くになっても行くべき道が絶えてしまったとき、この一句に道を見出したのでした。木村さんの詩に、

道がある

道がある

たつたひとつの道がある

ただ念仏の道がある

極重悪人唯称仏

とあります。この一道を歩まれ、最晩年には深くお念仏を喜ぶお方になられました」

B 「第十八願の〈乃至十念

若不生者 不取正覚〉のお心はほぼ分かりました。次に第十八願には〈至心信楽欲生我国（至心信楽して我国に生まれんとおもえ）〉とあります。このお心をお聞かせください」

A 「次号でお話しします」

(了)

本山（東本願寺）からの出版物を読んでいたら、訓覇信雄師の言葉が引用されていた。それは

「仏法を聞かせていただくと言つても、仏法なんか聞いておらん。わかるうとしていただけや」

「みんなわかってても助からんということがわからんのです」

「仏教とはわからんことを覚えるんではない。わかつていると思つてたことが、実は少しもわかっていなかったと気づくことである」

という言葉である。これは厳しいが大事な言葉である。

訓覇師は大谷派では名総長といわれた人で、私が本山の研修部（同朋会館）に昭和四十四年ごろ短期間勤めていた時の総長でもあった。このころ同朋会運動が盛んで、同朋会館に勤めていた時に、訓覇師のこうした言葉がよく飛び交つていたのを思い出す。こうした言葉は現在余り語られなくなつて、現在では「聞法

せよ、聞法したら道が開ける」

とばかり語られているが、訓覇師のこの言葉の一线にぶつかるまで聞くことが大事である。聞いて「わかった」というところで腰を下ろしてしまふのは、仏法を聞いているつもりで実は聞いていないのである。この「少しもわかつていない」という壁にぶつかつて、この壁の前で「出離の縁あることなし」「助からぬ身」という我身を痛感する。この一点において「計らいがすたる」のである。この訓覇師の言葉はそこへと導く言葉である。

「わかる」と「信じる」の間には質的な違いがあり、大きな壁がある。「わかる」というところから「信じる」には連続的に続いているのである。聞法は「わかった」私がまったく否定されて「まったく一文不知の私であった」というところまで聞くのである。そこに自ずから弥陀の本願は我身に貫徹するのである。(了)

【住職雑感】最近、いかに多く

のものに囲まれ、恵まれているかに今更ながら驚く。目の前に机あり、畳あり、ガラス戸あり、草あり木あり、エアコンあり、服を着ており、食べ物をおいただき、水あり、空気あり、太陽あり、山あり、道あり、なんと多くのもの、我ならざるものが与えられ、それらによつて生かされているばかりか、この身体に目あり、耳あり、心臓あり、脳ありで、周りの一切が「我ならざる」物やはたらきばかりである。それらによつて今ここに生きていくことができるという、日頃当たり前にしていることがみな頂きものであることに、この歳になつて、あらためて驚く。おかげさまとか御恩ということが実は非常に身近な事柄で、こういう我ならざるはたらきにおいて生きていくという、当たり前と思つていたことがまったく不思議なことであり、この事実が人生の基礎であることがようやく少し実感になってきた。この事実以外に人は存在しない。これは宗教とか思想を超えた単純にして一番基礎の普遍的な眞実である。猫も犬も鳥も虫も、みなこの事実にて生きていて、この私も同じ平等ないのちに生かされている。